

受験の昭和史

—— 『蛍雪時代』の投稿ユーモア欄の分析 ——

尾中 文哉

これまで試験の歴史は、制度史つまり実施者の側からのみ描かれてきたが、本稿では、受験雑誌の投稿欄に注目することにより、受験生の意識という側面から分析を行う。そこで現れてくるのは、昭和初期から今日にかけてのおよそ三つの変化である。第一に、受験生の生活の中で、家族の比重が低下してくるが、とくに威厳のある親父が消えていく代わりに、ただ一人重要な人物として、母親が現れてくる。第二に、学校における進路指導や受験産業の行う授業・模試その他情報提供が発展することにより受験準備がシステム化され、浪人も社会的に認められた存在になっていく。第三に、受験生にとって試験が、他人を出し抜いても越えるべき個人的な試練から、互いの連帯を生ぜしめる共通の苦難という色彩を帯びるようになったことである。これら三つの変化は、昭和30-40年代を中心として起こっており、戦後改革により直接惹き起こされたものではなく、むしろ、高度経済成長にともなう社会の変化が効いていると思われる。

第一章 はじめに

第一節 「受ける側」からの記述

試験の歴史は、これまで常に、実施する側の視点から描かれてきた。その多くは、狭義の制度論であり、どのような試験が実施されてきたかについての時系列的記述である(清水 1957; 天野 1983; 宮脇 1981)。それは必ずしも現在の試験に対して肯定的であるばかりではなく、批判的である場合ですらも、もっぱらそうであった(佐々木 1984)。彼らは、そのような記述の中で、「社会的公正」の概念を暗黙裡に導入しつつ、「前」試験的社会に対する試験社会の正しさをほのめかしたり、あるいは、試験制度が「資本」や「権力」や「支配階級」の戦略の一部であることを指摘して、批判しようとする。しかしその中で受験生がどのように考えていたのかということは、殆ど触れられな

いままなのである。受ける側の意識が扱われる場合でも、「立身出世主義」といった形で、制度の意図に沿った側面だけを、ステロタイプのにとらえるにとどまっている。

試験制度の改革が、国家のマンパワー政策や大学の威信といった、実施する側の都合によって行われているという状況は、このような試験の歴史しか存在しないことの背景であり、帰結である。

従って、受ける側の意識を主題化することは、現在、重要な意味を持つことと考えられる。前号の論文では、試験を「能力の客観的判定技術」とみるのではなく、「儀礼」つまりその象徴作用に着目する見方が現れてきつつあることが確認された。しかし、「儀礼」として見る見方が十全に展開されるには、実施する側が意図している「意味」、無意識に含ませている「隠された意味」ばかりではなく、受験者がどのような

「儀礼」として読んでいるかを見る必要がある。たしかに試験の制度は、やり方についての議論は尽きないとはいえ、大筋では順調な制度として成り立っている。しかしだからといって、受験者が実施者と全く同じ仕方で解釈しているとは限らない。全く異なった解釈が成り立っているからこそ安定した制度が維持されているのかも知れない。受験生は実施者が想定している役割を従順に受け入れる機械ではない。彼らは、実施者の要請に従うようにみせながら、同時に注意深く *role distance* をとり、自分たちに固有の仕方でそれを意味付け、生活の中に位置づけているのではないか。そうした側面を明らかにしない限り、試験という儀礼の意味を解き明かしたことにはならないだろう。

「受験生」が主題となり難いひとつの理由は、この付近についての研究の専門家である教育学者の多くが、入学試験は選別の装置であって本来教育にはあってはならない、という信念を抱いていることにある。そうした信念によって、「受験生」はいわば「裏切り者」である。したがって、こうした研究には、むしろ社会学者の方が向いている。

第二節 方法について

主題化されないもうひとつの原因は、そもそもこれをとりあつかう十分な資料が欠けていることである。狭義の制度史であれば、制度の形態や意味の形成・変遷過程を扱うことは、行政や学校の記録など多くの資料によって可能となる。しかし、受験生が如何に理解していたかを示す資料、しかも社会科学的考察に耐えるだけの資料はきわめて乏しい。現在でもこのような調査は数少ないし、過去のこととなるとなさらである。

その中から本稿では、受験生向けの雑誌を取

り上げる。この種の雑誌は、大学受験だけに限っても十数誌を数える。もちろんその記事の大半は、単に編集者の考え方を表しているに過ぎない。しかし、投稿欄は、編集者の選択（場合によっては改変）を加えられることがあるとはいえ、かなりの程度正確に受験生の意識を知る手がかりとなるだろう。そこで、そのような投稿欄の一つとして、旺文社刊『螢雪時代』の「受験ユーモア」欄を取り上げよう。『螢雪時代』は、現在発行されている受験雑誌の中では最も古いものの一つで（大正6年の『高校英語研究』を除けば、他は戦後創刊）、昭和七年に『受験旬報』という名で創刊された。現在では、この種の雑誌の中ではもっとも多い39万部を発行している。「受験ユーモア」とは、創刊翌年（昭和8年）から今日まで続いているものであり、昭和の時代の流れに沿って受験生の意識を追うのに適した資料といえる。しかも、他の投稿記事に比べ、非常に短くまとめるという制約があるために、意味の構造が明確でその時系列的な変化を追いやすい。問題は、編集者により選択されるという点であり、特に発行部数が増大してから、この欄に採用される率が低下したため、編集者の感覚に左右される部分が大きくなっている。けれども、「秀逸だ」とその時代の編集者に感ぜられるような作品は、やはりその時代の受験生の心の深部に発するものであるからこそ生まれたという面があるし、また類似の作品が多い場合にはそのなかで代表的かつ洗練されたものが選ばれると考えられる。従って、選択の問題はあっても、他の記事よりも受験生の意識を映し出すようなデータを十分に含んでいると考えることができる。但し、本稿は、原資料収集上の制約から、旺文社によって昭和60年に刊行されたアンソロジー（旺文社編1985）を使用せざるを得なかった。従って、

現在の編集者の感受性により再度選択がなされた資料を使っているわけであり、もう一段バイアスがかかっている可能性に注意しなければならない。

次に、「ユーモア」を扱うことの意味について考えてみよう。この欄に書かれているのは、新聞報道や学術論文の目指す、客観的事実の記述ではなく、単なる「作り話」にすぎない。しかし、文学や漫画や民話がそうであるように、「作り話」であることは、意識に関するデータとしての価値を少しも損ねるものではない。なぜなら、「ユーモア」が作り話であるにもかかわらず耳を傾けるに足る「面白さ」を持つものとして語られ、また特にあるパターンにおいて繰り返し語られたということは、それが、読み手と書き手の間に共有されたリアリティが存在したということを示しているからだ。つまり、受験という状況に対して、あるイメージが共有されていることを前提として初めて「面白さ」が成立するからだ。この意味で、その時代の受験生が、受験をどう捉えていたかを探る、非常によい資料を与えてくれる。それは、統計的諸データ（入学者数、進学率、階層移動率など）だけではけっして明らかにならない意味連関を示してくれる。しかも、それがインパクトをもつ「作り話」であるためには、読み手が普段考えてもいず、いわれて初めて気付くような深い関連をユーモアは看破しなければならない。

また、「ユーモア」は、さまざまな「作り話」の中で特に、この共有されたリアリティに対して、距離を置いた detached 立場をとる。つまり、普通に、当り前のように信じられているリアリティを、一瞬のうちに滑稽化してしまうような第三者の目を設定する点に特徴があり、そのために他の「作り話」よりもいっそう、共有されたリアリティが鮮明に、しかも単純化さ

れた形で浮き立たせる。ただしその場合、滑稽化されたリアリティのほうばかりではなく、そのために導入された第三者の視点や、滑稽化の仕方などもまた分析の対象となる。

そして、本稿が目標とするのは、単なる意味的解釈だけではなく、ある意識がどの範囲で分布しているかに注意を払い、かつそれが統計的に同定される変化や歴史的事実とどのように関連しているのかを見出すことである。そうした手続きによって初めて、社会科学に意味のある命題がえられる。

対象について。対象となるのは受験生といってももちろん、ある特定の層、つまり『螢雪時代』の読者となる層である。これは戦前の制度で旧制中学の上級学年或は卒業生で、「高等学校」を初めとする上級学校へ進学しようとした人であり、戦後の制度では、新制高校の上級学年及び卒業生で、新制大学を受験しようとする人である。『螢雪時代』という資料は、この層を比較的よく代表していると考えられるが、それでもあるバイアスをもつことには注意しなければならない。89年11月現在の『螢雪時代』の読者は、高校生62.7%（高三57.7%）、浪人35.8%であり、88年度大学入学志願者の比率（54.1：45.9）に比べ、浪人生読者の割合がやや少ない。性別比は女28.9%男71.2%であり、短大を除く大学入学志願者の性別比35.0：65.0に近いが、やや男が多い。浪人生読者のうち宅浪生ばかりでなく予備校生も多い（49.5%）が、浪人大学入学志願者17.4万予備校生14.7万という現状では、宅浪生読者がやや多いとみるべきである。また、志望に関しては、大学志願者が93.5%と殆ど（短大は2.7%）だが、さらに第一志望を国立とする者が62.3%を占めている。従って、高いレベルを狙う受験生、豊かでない家庭の受験生が多い

可能性などがある⁽¹⁾。その他、この統計に出ないバイアス例えば、大手予備校の情報網が十分行き届かない地方の受験生、大学受験が主流でない高校が出身の受験生が多い可能性が考えられる。加えて、実際に扱われるのは、この中でも特に「投稿」した人とならざるを得ない。

第三節 受験の意味世界の

変化と不変化

五十年余りにわたる「受験ユーモア」をみわたすと、そこには大きく分けて二つのことがある。ひとつは、時代を問わず、受験生にとっていつも存在してきた感覚であり、いまひとつは、時代によって変化してきたものである。前者の例は、例えば次のようなカレンダーである。

[浪人になる迄]「四月—サア今年こそ一生懸命にやるぞ。五月—未だ春だ、一寸位遊んでも……。六月—まず健康だ、運動をして。七月—夏休みには日課を決めて。八月—こんなに暑くては。九月—十五日からは。十月—シネマシーズン之を見逃しては。十一月—未だ四ヶ月と二十日あるぞ。十二月—一年が改まったら一生懸命やろう。一月—せめて正月だけは遊ばなくては。二月—あと三十日と千時間、徹夜しても間に会はない。三月—来年は必ず……。」(S 8., p. 13) (作品の表示の仕方は、[タイトル]、作品、(掲載年、アンソロジー中のページ数) という形式に従うこととする。) この先送りの欲求は、入学試験へ向けての地道な準備が要求されるようになった時代に初めて知られるようになった感覚であり、また特に、明治末から大正にかけて(旧制)中学校への進学率が高まり、それにもない高等学校受験の競争率が高まっていった時期に広く若者を捉えるようになった感覚である。これは、今日とそう変わることの

ないもののように思われる。

これに対し、後者は、さらに大きく二つに分けることができる。ひとつは、教育制度その他政府レベルの大きな変更があり、受験生が異なる状況におかれるようになったために生じたものである。日本の教育制度は国家の変容が直ちに影響する点に特徴があり、この変化は極めて顕著に起こる。この最も大きな例は、いうまでもなく、敗戦・戦後改革によってもたらされた諸変化、例えば、旧制高校・一部専門学校の新制大学への統一、「陸士」・「海兵」というコースの消滅、共学の実施などである。それらはまた、或は迅速に、或はゆっくりと、受験生の意味世界にも影響を与えていった。制度の変化自体は別の資料で容易に知ることができるから、この資料で課題となるのは、制度上の変化が「現場」ではどのように起こり、受験生にどのような影響を与えたのか、ということである。いまひとつに、制度上の変化とは直接関係のない変化、つまり、社会の他の領域からの影響に起因したり、学校や受験生が自発的に起こしたりする、非制度的変化が存在する。これは、制度的変化と異なり、別の資料によっては分かりにくいものなので、細心の注意を払って検出する必要がある。その反面、これこそがまさに、「受験ユーモア」という資料が個有に明らかにすることのできる不連続である。

以上のような、変化／不変化の三つの層を踏まえながら本稿が行うべきなのは、昭和八年から六十年に至るまでの間で、受験の意味世界のどこに決定的な変化が存在し、その変化の前後でどのようなものからどのようなものへ変わってきたのかを記述することである。

第二章 様々な変化

第一節 人間関係

「受験ユーモア」は多くの場合、二人の人物の間の対話の形式をとっている。その二人がどのような人物であり、二人がどのような関係にたつか、ということは、受験期においてどのような人間関係が重要かを示すデータである。そして、これは、いくつかのパターンに分けることができる。

パターン1. 「試験官」と「受験生」の対話。このパターンは、戦前に特に見られるパターンであり、戦後には減ってくる。例：「君の愛読書は？」「東郷平八郎傳とエヂソン傳であります」「ホー、いかなるわけで」「先生が、その辺りが穏当で無難だらうと教へて下さいましたので」「ダー」(S 12., p. 53)。試験官はいつも威厳を備え、威丈高に質問を発する。それなのに受験生は、思わずか意図してか、とんちんかんことをいってしまうのが主なパターンである。このパターンの減少は、直接には、戦後における筆記試験の重視という制度的変化ととらえることができるが、この変化を経て、戦前の受験の世界に存在した、口頭試問における「人」に対する恐怖が、戦後なくなっていく。

パターン2. 友人同士の対話。これは、同じ境遇にある友人同士、片方が優秀・合格者の場合など、様々なヴァリエーションがあるが、基本的には、今日に至るまで変わることなく、受験生にとって重要な人間関係である。

パターン3. 教師と生徒の対話。その場面設定の一つは、これは、授業における応答であるが、これは、当初から今日まで、コンスタントに見られる。先生「木の葉が落ちるから fall ともいう」生徒「それでは三月も fall ですか」(S 35., p. 169)。それに対し、「進路指導」

と呼ばれる特別の場面における応答は、ある時期から急速に増えてくる。「先生、ぼくやっぱりA大をあきらめます。」「おやまだあきらめていなかったのかい。」(S 53., p. 246) それと同時に、推薦入学についての対話も現れてくる。「先生、僕をAでT大に推薦してください」「君は僕をクビにする気か!」(S 42., p. 196)。しかし、「進路指導」がしばしば扱われるようになるのは、推薦入学制導入(S 40 前後)以前からである。「国立か私立か迷っているんですが……。」「なに? 君、とうとう国立の予備校ができたのか。」(S 37., p. 177)

パターン4. 家族と受験生の対話。これは、非制度的な領域の典型であるが、デリケートでかつ大きな変化を観察することができる。まず、家族は、最初の頃にはしばしば登場する。両親もきょうだいも、時には全員が登場する。浪人「お父さん、ハーモニカ買って下さい。」父「馬鹿、浪人のくせに生意氣云ふな!」浪人「お母さん、少しお小遣い下さい」母「何です、浪人のくせに。あつちへ引こんで勉強でもなさい。」浪人「兄さん、今度のラグビー見物につれてつてくれない?」兄「よせやい! 浪人の弟なんか連れて歩けるかつてんだ。」浪人「姉さんの着物きれいだね。」姉「アラ、浪人がそんなこと言ふもんぢゃないわ。」浪人「おいミー坊、そのバナ、一本おくれ。」ミー坊「ビーだ。」浪人「そら見ろ、くれないからバナ、の皮ですべるのサ。」トン子「アラ! ミーチャンすべったの、浪人の兄さんみたいね。」(S 10., p. 27) しかし段々にその占める割合は減少していく。その中でただ一人生き残っていくのが母親であり、現在では母親は、家族の中で唯一頻出する人物である。しかもその役割は決っている。「マンガばかり見ていないでたまには勉強なさい」「ぼくのそばにばかりいないで、たまに

はごちそう作りなよ」(S 46., p. 217)。この母の突出という事態は、昭和40年代からはっきりしてくる。父親は当初は、受験生を叱咤激励する主な役割を担っていた。親爺「なにまた落ちたと。今年こそは石にかじりついてもなどと殊勝なことを言っていた口の割には勉強をなまけてゐたんだな！」息子「べ、勉強はしたんだヨ。だけど〇高にや、かじりついて大丈夫な石がなかったんで」(S 17., p. 102)。しかし、この状況は、戦後かなり早い時期から変質し、子供の合格に関心は持つけれども物で釣ろうとするなどあまり怖くない存在となる。呼び方も「親爺」・「親父」から単なる「父」となり、頼りない出資者でしかなくなってくる。上京の息子「シケンパスハヤクカネオクレ」国もとの父「ダイガクカヨビコウカヘンマツ」(S 33., p. 160)。こうした移行は、次のような対話にも現れる。兄「勉強のじゃまだ。ラジオ消してこい」弟「おやじが聞いているよ」兄「おやじを消してこい」(S 35., p. 168)。ここで、怖い「親父」から口うるさい「教育ママ」へと、叱咤する主要な人物の移行が起こっているわけだが、但し、母親が、このとき初めて子供の勉強に関心を持つようになったわけではない。母親は当初からこのようにいっている。「これ怠雄や、こんなに丸や三角ばかり書かないで少しは試験勉強をしなさい。又落ちますよ。」(S 8., p. 13)。つまり、母親の意識の変化というよりは、父親がもはや怖い存在でなくなり、母親の役割が相対的に大きくなり、クローズアップされた、というのが実情と考えられる。

パターン5. 母親同士の会話。これは、当初には見られない全く新しいパターンであって、先に論じた「教育ママ」の登場と深い関わりにある。なぜなら、それは例えば、「うちの子もお宅の坊ちゃんと同じ大学を受験するんざあま

すよ」「まあ、そんなにおできになるんざあますか」「いえ、ほんのすべり止めざあますの」(S 47., p. 223)という具合だからである。彼女らは非常に見栄っぱりであり、つねにせりあっている。彼女らは、しばしば「ざあます」言葉を使う、すこしでも「上流」に見せようとする人々である。昭和40年代前半に現れたこのパターンは、暫くの間かなり頻繁にみられ、その後もひとつのスタイルとして定着する。

他に教師と母の会話があるが、これは、進路指導の重要化と教育ママの登場が交差する点に位置づけることができる。母「でも本人もT大を望んでおりますのよ」教師「えっ、本人までがですか」(S 43., p. 206)。

パターン6. 恋人同士の会話。「まあ、あんた、あたしと会いながら勉強してるのっ！」「うん、ふだんは君のことばかり考えていて勉強する暇がないんだ。」(S 47., p. 222)これはかならずしも多くないパターンだが、昭和40年代になってはじめて現れてくるパターンである。このように、恋愛関係の存在を示唆する作品は、一般に新しい。「彼女からのラブレターで勉強が手につかないんだ」「じゃ、出すな、といってやったら?」「しかし、来ないとまた勉強どころじゃないんだ」(S 40., p. 186)「紹介するよ。僕の母だ」「紹介しちゃおう、僕のガールフレンドだ」「紹介します。僕の妻です」(S 40., p. 187)昭和30年代にはまだ片思いを示唆するもののみである。「彼女がA大へ行けば僕も行こう。だが彼女が女子大へ行ったらぼくはどうすればいいだろう。」(S 34., p. 165)戦前になると、さらに抽象的になってくる。浪人A「君ィ、鯉と鮎ではどっちか好きかね?」浪人B「戀と愛とかね、戀の方がいいよ。女と一緒にボートなどにのれるからね」浪人A「?……?……」(S 10., p. 26)。

この変化の一つの基礎的条件は、中等教育レベルでの「共学」実施という制度的変更である。女性の予備校生は、このことにより初めて現れ得た。しかし、実際に恋愛が具体化するのには、遥かに遅く、昭和40年代になってからである。昭和40年代も半ばを過ぎると、なれあってしまったような恋愛関係すら見られるようになる。

以上のように、受験生にとって有意味な他者を探っていくと非制度的変化として次のようなものが浮かんできた。一つは、教師の進路指導の重要化であり、いま一つは、駆り立て役の、親父から母への移行であり、いまひとつは、恋愛関係の登場である。以上の変化は、昭和30-40年代に起こってきた。そして、対話パターンの全体的移行を見れば、最初は、口頭試問における試験官との対話、父親・きょうだいとの対話、友人との対話から、昭和30-40年代を経て、教師との対話、母親との対話、友人・恋人との対話、母親同士のつばぜりあい、というものによって変わって行く。

第二節 進学先のイメージ

受験生は、ある学校への進学を目指している。もちろん、受験生によって進みたい学校が違うわけだが、目指す学校についてどのようなイメージを抱き、どのような意味で行きたいと思うかについては、パターンがあり、それは変化を見せている。これに関しては、制度上の変更が影響を与えているわけだが、その影響ほどの程度か、またそれが最も大きな変化なのか、が一つのポイントとなる。

パターン1. 「あこがれの〇〇」タイプ。「B君、陸海軍の学校は良いね、国防の第一線に、そして未来は大臣大将か。高校は良いね、末は學者か大臣か。高工は素晴らしい、戦時体制下の今

日、エンジニアは各方面で渴望されてゐる……。」(S 14., p. 66) など、それぞれの学校が、固有の意味づけにおいて志望されるというパターンである。もちろん、固有の意味といっても、「學者か大臣か」のようにかなり抽象的なものであるが、それでも、この時期には、「志望校」と「戀人」とは「相似」であり(S 11., p. 38)、ここでなければならぬ、という唯一性をもっている。

パターン2. 「一流校」-「三流校」タイプ。戦後暫くすると大学のイメージがはっきりしなくなるが、昭和30年代末ごろから大学間のランク差が明確に意識されるように思われる。妹「春には小さくて、だんだん小さくなるものなかに」弟「……」妹「お兄ちゃんの志望校」(S 40., p. 187)。『志望校』欄にT大、K大、W大と書いて出したら、先生がもう一枚紙をくれた」(S 40., p. 186)。ここでは、学校が固有の意味を失い、「一流校」-「三流校」という尺度体系の中に編成されて行く過程が、ここには存在している。そのもっとも直接的な表現は、次のような「比較もの」である。「一流大-専門バカは作らない、三流大-専門バカも作れない」(S 51., p. 236) 頻出するこのパターンは、「一流大」と「三流大」の間で、優秀さや合格難易度を対比的に示し、「三流校」をおとしめる、というものである。選択は、このように、抽象的かつ尺度化された形で行われるようになった、ということができる。[カサ盗人のランキング] Aランク「これが、いいや」 Bランク「これで、いいや」(S 58., p. 272)。

このことは、新制になって、「高等学校」「高等師範学校」「高等商業学校」「高等農業学校」「高等工業学校」などの名称の差異がなくなり、「大学」という名称に統一されたことを前提としている。もちろん、戦前のこうした名称の間

には、「一流」「三流」と同型の意味も含まれている。しかし、それでもやはり、「一流」「三流」という理解が強調され出すのが昭和40年代以降であるということは、単なる制度的変化にとどまらないものを、パターン2の登場が含んでいることを示している。

第三節 入試のイメージ

入試は、受験生にとって、もっとも重要な出来事であるが、それが、どのようなものであるかについてのイメージは変化している。

パターン1。「試験はくじ」。「要するに試験はくじみたいなものだ」「冗談じゃない、くじなら稀には当たることがあらあ」(S 11., p. 40)。これは最初の頃繰り返し見られる認識である。この認識は、試験が、ある偶然性によって左右されるもので、何ら確かな手だては存在しない、という認識を示している。昭和10年には、頬杖をつきパイプをくわえたいじわるそうな試験官が、小さな受験生のぶらさがった無数の紐からひとつを適当に選ぼうとしている「幸運の縄」の漫画が投稿されている(S 10., p. 33)。

パターン2。「試験はゲーム」。つまり、一定のルールのもとで勝ち負け、より高い得点を競うゲームだ、という感覚である。これは、くじと同じように、偶然性も含まれるが一定の修練や能力の関与、競争の発生が前提されている。これはかなり新しく、明確になるのは昭和50年代に入ってからである。「二万点とったら、大学入試センターから、もう一回ゲームができますと通知がきた」(S 57., p. 268)。これは、ゲームセンター等でのゲームの感覚であるが、スポーツになぞらえるものもある。「五輪は英数国理社を表す、それにしてもアマチュアリズムの衰退がなげかわしい」(S 55., p. 257)。

競馬になぞらえるもの「彼は競争率20倍の難関に突破して、受験料の20倍の払い戻しを大学側に要求している」(S 53., p. 243)。「馬一受験生」(S 50., p. 232)。もちろん、マシンゲーム、スポーツ、競馬、それぞれ意味は少しずつ異なるが、いずれにせよ、ゲームという理解は、新しい感覚である。パターン1においては、競争の要素は、強調されていない。

パターン1は、旧制時代に口頭試問が重要で、運の要素が強かったと考えるならば、制度的変化と考えることもできるが、新制になってもしばらく「試験はくじ」という認識はみられるし、パターン2の出現が相当遅れることから考えても多分に非制度的変化が含まれていると考えることができる。パターン2の出現は、大学イメージにおける「一流」「三流」という図式の定着とも関わっているだろう。つまり、抽象的尺度としての大学ランクが確立して初めて、「ゲーム」という感覚と符合するようになるからだ。「ゲーム」の感覚は、共通一次と結び付けて語られることが多いが、以上のように、それ以前からこの感覚は生じている。

第四節 受験勉強のスタイル

受験生は日々(時々或はちよくちよくさぼりながらも)勉強している。作品は時折、そのスタイルがどのようなものであったかを覗かせてくれる。

パターン1. ひとりで机に向かう。これは、漫画の形式をとってしばしば描かれている。笑いのネタのひとつは、睡眠である。朝から晩まで眠り、「不眠症全快」した浪人たち。机は常に、畳の上に座る式の座机であり、周囲には目標や標語やげき文が貼ってある。やがてこの座机は、椅子式にとって代わられるようになったが、しかしのみならず、机に向かうシーン自体

が、主題とはなり難くなっていく。

パターン2. それに対して、学校の（予備校含めて）机に向かう姿が記述の対象となっていくパターンがある。一般に学校や予備校でのやり取りの比重が増えているだけではなく、睡眠のギャグが、学校の机の上で使われるようになってきた。[夏期講習の成果]「偏差値が20アップした」「ガールフレンドができた」「寝冷えした」(S 57., p. 269)。

この変化の背景にある一つの要因は、予備校の発展という事態であろう。「宅浪」というスタイルが予備校通いというスタイルに置き換えられていくプロセスである。予備校は、既に大正期から発展を遂げ、『螢雪時代』が発刊された頃には、現在の駿台、河合塾が創立されているし、「受験ユーモア」の中にも当初から「豫備校」は登場している。しかし、予備校の比重は、特に昭和40年代以降目だって増えており、予備校の細かな内部事情を前提にするものとなっている。

予備校と共に受験生の間にひろく広がったと見られるのは、「模擬試験」の重要性である。

「合否判定の的確度が高すぎて、某予備校模試には受験者がいなくなった」(S 50., p. 232)。模試は、もちろん昭和初期にも予備校が行っていた。しかし、そこではやはり「試験はくじ」のようなものであって、模試の成績はそれほどあてにされてはいない。しかし、予備校の情報網の発展とともに、予測可能性の高いものと思われまた実際にそうになっていった。[模試]秀才「力だめしに受ける」鈍才「肝だめしに受ける」(S 49., p. 226)。「追込みの起爆剤にするつもりが、自爆剤となった」(S 53., p. 246)。「今度の模試、受けるかい?」「どうもねえ。他人に自身をつけさせるだけだからねえ」(S 48., p. 224)。

このような模試の重要化は、予備校がよいの一般化ともあいまって、先に触れた、進学先、入試のイメージの変化とつながる。つまり、受験生は、ある大学についての合格可能性を客観的に知ることができるようになり、しかも、国立・私立、文系・理系などに区分されたランキングによって、あらゆる大学についてそれを知ることができるようになったのである。つまり、この、模試による合格可能性の透明化が、「一流校」「三流校」という区分において、大学を捉えるようにさせたし、また、ゲーム的な性格を持つようになったこととも関わっている。そして、それは、受験勉強のスタイルが、一人で机に向かうことを中心とするスタイルから、予備校（あるいは高校）の授業を中心とするスタイルへと変身を遂げたこととも関わっている。（もちろん、パターン1の行ったようなスタイルにおいても通信添削や参考書などの形で産業化されたシステムが入り込んでいたとも言えるが、その程度はきわめて低い。）

第五節 「浪人」のイメージ

受験生は、在学者と卒業生の二つの層からなるが、後者すなわち「浪人」という存在の独特さは、常に題材となってきた。しかし、その描かれ方は、大きく変化している。

「浪人」は昭和初期には、きわめて不名誉で後暗いことであった。「浪人一年いやなもの、世間の人から後指」(S 14., p. 69)。「馬鹿、浪人のくせに生意気いふな!」(S 10. p. 27)。外へ出ることすらはばかられ、絵に描かれるときは常に髭が伸び放題で、トレードマークにすらなっている(S 9., p. 18、S 11., p. 38、S 11., p. 47)。

しかし、やがて浪人は当り前のことになっていき、「やっと入試の山を乗り越えたら、そこ

は浪人の海だった」(S 50., p. 234)。しかも、「浪人」ということが人生にとって貴重な経験である、という認識も多少の留保付きではあるがなされるようになった。「人間は一まわり大きくなったが、志望校は一まわり小さくなった」(S 53., p. 246)。

浪人にとって、「繰り返すこと」が最も恐ろしい想像である。このことは終始一貫しており、「多浪」は格好の主題である。万年浪人「一年去ってまた一難」(S 47., p. 221) けれども、最近ではかなり余裕が出てくる。「予備校の帰途、背広にネクタイの旧友が青くなって就職に走り回っているのに出会った」(S 54., p. 253)。こうした、「浪人」の通常化、否定性の緩和は、「一浪はヒトナミ」などという周知の文句に既に表現されているが、その背景には、受験勉強がシステム化され、リスクが減少し、一浪することによる成績上昇が予測可能になってきたこととも関わっているだろう。また、一番最初に論じた家族の中での位置の変更もあろう。つまり、浪人を常にののしるこわい親父がいなくなり、「勉強しなさい」と繰り返しながら試験場までついてくるやさしい「ママ」にまもられて、浪人生はひげめを感じる必要が少なくなった。家族は、受験生を大事にし、ハレモノに触るように対応するようになった。「宅浪のAの家は、全員がパントマイムの達人である」(S 60., p. 285)。一種の特異化された存在ではあっても、あからさまに攻撃されることはなくなったのである。また、恋愛すらも可能になったのであり、普通の高校生と変わらなくなってきた。[浪人同士の男女交際] たいていは男がまた落ちる (S 53., p. 266)。

最近では、「いま、予備校がオモシロい」などと、浪人生活を高く評価する言説が出回っている。たしかに、以上見たように、最初期に比

べると、はるかに社会的に容認された存在になってきているとはいえ、しかしやはりある種の引け目、不安から逃れられない存在であることは変わっていない。浪人生は、やはり明るくはなりきれず、心をすさませる領域に生きる者たちである。[浪人生野球大会] 犠牲フライやバントをしようとする選手が一人もいなかった。(S 57., p. 269)

第六節 カンニング

カンニングとは、試験という制度において最も強く、しかも明示的に「規範」というものの作用を示す現象である。カンニング（それは、他人の答案を覗くことであれ、何らかの資料を持ち込むことであれ）は、強い禁止をとまっており、違反すれば答案が無効化されるばかりか、ときには受験資格を失うことすらある。例えば、「性」がそうであるように、強い欲望の対象でありしかも強い禁止が存在するものは、一般に笑い話のネタになりやすいが、カンニングはまさしく、もし成功すれば高得点をもたらしてくれるが、失敗すれば全ての可能性が断たれ重い処罰が待つ、という両義的な事象である。このため、その事象を暗示するだけでそれはすでに笑い話としての価値をもっており、実際題材として多くみられる。しかし、その頻度と形態には顕著な変化がある。

まず昭和10-20年代。この時期、カンニングが主題化されることは、ないわけではないが、少ない。そしてそのイメージは、常に単独犯であり、例えば、窓の外に鏡で仕掛けを作り本を見たり ([物理応用] S 11., p. 40) している。先に紹介した「幸運の縄」には、みんなが必死にくいつている中、「カンニング生」は、ひとりニコニコとぶら下がっている (S 10., p. 33)。ここで主題となるのは、カンニ

ングの仕方か、または、捕まったときの教師とのやり取りである。[多数決]「凸君、君は昨日の試験にカンニングをしたそうだね」「僕、カンニングなんか絶対にしませんよ、先生」「嘘いっちゃいかんね、見たって人が三人もいますよ」「けれども先生、見ない人だって四〇人もいますよ」(S 26., p. 139)。[軍備とカンニング]「議会で——議員『首相! どうせするならどうとやり給え』首相『しかし……』学校で——先生『どうせするならどうとやり給え』生徒『しかし……』」(S 29., p. 146)。つまりここでは、カンニングは一人でこっそりやるものとしてイメージされ、それがバレるかどうかが主題である。

昭和30年代にはいと若干変化が訪れる。もちろん、単独犯的なものも持続しているが、そこに生徒間の相互作用の存在を前提する作品が加わってくるのである。「試験で隣の答案をのぞいたら、余白に『見せてくれ』と書いてあった」(S 31., p. 155)。それは、共同正犯、同時犯的なものばかりではなく、消極的な協力つまり、答案をみせたりはせず見られたら隠そうとするが、試験官に密告はせず秘密を守る、というものである場合もある。[四面楚歌]左のやつが見るので答案を右へずらしたら、右のやつがのぞき込んだ。あわてて両手で囲ったら、後ろのやつがのぞいたので、机の下へかくして前を見たら、試験官がにらんでいた(S 32., p. 158)。またこの時期に、カンニングは、主題として頻繁に取り上げられるようになり、このような相互作用のあるものが多くを占めるようになる。

この変化は、どのように捉えたらよいであろうか。それは、カンニングという事象の持つ意味の、かなり決定的な変化を示している。昭和10-20年代には、カンニングは、個人的な

抜駆けであり、教師にとってばかりでなく、他の生徒にとっても同様に強い禁止事項に属していた。また、イメージもそれほどリアルなものではない。けれども、昭和30年代にはある「発見」を主題とした作品が登場する。つまり、試験のまっ最中に、他人がカンニングをする存在であることを「発見」する作品である。先の「見せてくれ」や「四面楚歌」もその例である。「入試でカンニングしようとしたら隣の奴と目があった。僕はあきらめた」(S 45., p. 213)。つまり、カンニングという事象について生徒間の相互作用が生じ、一定の協力、最低でも密告しないという規範が含まれている。反対に、昭和10-20年代には、密告の存在を前提する作品があったことを見た。さらには、事前に了解ができた計画的共犯を示唆する作品も現れる。

[ギブ・アンド・テイク]「両側の友だちのカンニングの伝達係を引き受けたら、満点をとった」(S 33., p. 161)。ここでは、規範の二重化と葛藤が存在している。つまり、この時期にあっても、カンニングは依然として「いけないこと」に属しており、とりわけ、教師・試験官との関係においては、厳格な禁止が存在している。昭和10-20年代にはそれが生徒間でも同様に厳格に禁止されていたとみられるわけだが、昭和30-40年代には、生徒間において、教師・試験官-生徒間とは異なる規範が生まれてくるのである。つまり、試験における「助け合い」の倫理である。「試験はスポーツと同じである。まずフェアプレイが大切だが、ときにはチームプレイが一層大切である。」(S 59., p. 278)

このような、カンニングの意味変化を理解する上で重要なのは、事実と象徴の区別である。この変化についての一つの解釈は、このような「助け合い」的カンニングが実際に広まったか

ら、このような作品が多く語られるようになった、というものである。もちろん、こういう部分もあるだろうが、そればかりでなく、実際上のカンニングの広まりが存在しなかった場合でも、この助け合い的カンニングが、昭和30-40年代以降の受験生の感覚を表現するものであるが故に、繰り返し語られた、ということがありうる。つまり、カンニングなどに全く手を染めず、協力すらしない受験生までも、助け合い的カンニングが、受験生活におけるある真理を語っているが故に面白さを感じず、という場合である。従って、カンニングの意味変化は、カンニングという事象それ自体だけでなく、試験と受験生の関わりの変化を象徴するものとしても理解されねばならない。

これまで見てきたことからしても、試験と受験生の関わりは、昭和30-40年代を境に大きく変化している。昭和10-20年代には、受験生は、社会的援助を受ける存在ではなく、特に浪人に対するまなざしは厳しかった。しかし、そうであるがゆえに逆に「高等学校」その他の受験は、自由な選択であり、挑戦であり、また厳格な親父から逃れる手段であった。その時代にあっては、受験が、基本的に個人的な事件であり、カンニングが他人を出し抜いて単独で行うイメージを伴っていたこと、試験官からも他の生徒からも同様に強く禁止されていたことは不思議ではない。

しかし、昭和30-40年代を経て、受験準備がシステム化され、外では学校や塾・予備校が、家では母親がつかまとうことによって、受験は自由な選択ではなく強制された義務の色彩を帯びることとなった。そこでは、試験は、学校や塾・予備校に集まる受験生たちにとって、ある共通の苦難、という意味をおび、従ってそこには連帯の発生する契機が生ずる。そこで実

施者との間に存在する規範と（同じ規範ももちろん強く存在しているが）異なる規範が、生徒間に生まれることとなった。つまり、生徒を競争させ、その審判をしようとする実施者の要請する規範と異なる、実施者を共通の敵とみてそれを一緒にクリアしようとする生徒たちの規範である。助け合い的カンニングが語られるようになったことは、まさに、そうした新しい規範の発達と軌を一にしている、と捉えることができる。すなわち、試験という垂直性の儀礼に対し、横断的連帯をうちたてる対抗儀礼としてカンニングが語られるようになったのではないか、という解釈である。

試験と受験生のこのような関わり方は、さきに述べた、ゲームの感覚ともつながる部分をもつ。なぜなら、ゲームの感覚とは、試験を一種の遊びとみて、その限りで真剣にプレーする、というものであり、試験から一步退き、斜に構えた姿勢を示しているからだ。このような姿勢は、試験が、受験生に強制された苦役と化した時代に、せめてそれを遊んでしまおうという適応の仕方として捉えることができる。そこでは、あるシステムの中で走らされるハメになっている自分たちの姿が皮肉っぽく捉えられる。「馬-受験生、馬主-父兄、三歳新馬-現役、ハンディキャップ-旧課程履修、公営あがり-高専等卒、上がりタイム-最終模試成績、登録-出願、逃げ足-得意科目で点数かせぎ、大アナー鈍才合格」(S 50., p. 232)。

第三章 結論

第一節 三つの変化

本稿は、『螢雪時代』の「受験ユーモア」欄を取り上げることによって、試験を受ける側から受験の意味世界を明らかにしようとしてきた。

そこで扱われた事象は、試験を実施する側から捉えられる変化、例えば戦前の口頭試問重視、戦後の客観テスト導入、共通テスト化、最近の小論文・面接の復活など、多少の基準変更はあってもつねに「より優秀な」学生を「公平に」選ぶために試験は行われるというイメージのもとでは殆ど主題化されないことがらであった。

観察されたのは、大きく、三つの変化である。第一に、家族と受験生間の関係の変化である。つまり、つまり、強圧的な父親が受験生に脅威であった時代から、ソフトに口うるさい「教育ママ」の時代への移行、そして、全般的な家族の比重の低下、という事態である。第二に、受験準備のシステム化、である。昭和初期には受験生は、学校や参考書などから得た不確かで曖昧な知識を手がかりに、家にこもって勉強し志望選択する。従って学校はそれぞれ固有の意味をもち、試験はくじのようなものであった。しかし、ある時期から、まず学校の進路指導が大きな意味を持ち、また予備校の比重も増大し、模試その他受験についての予測可能性が増大し、一流校—三流校という区分が明確になり、一種のゲームという色彩を帯びてくる。第三に、受験生が試験に対してシニカルな態度をとるようになったことである。そのひとつの現れは、「ゲーム」という感覚であるが、いまひとつは、カンニングのスタイルが、他人を出し抜いても試験に勝とうというものから、試験に対抗する受験生の連帯を前提したものへと変化したことである。

第二節 時期区分の問題

本稿の主題の一つは、制度的変化特に戦後改革がどの程度決定的だったかという問いに応えることであったが、以上の変化を見る限り、決定的な変化は制度的変更に戻元できるとは思わ

れない。以上の変化はいずれも昭和30—40年代に起こっている変化であり、内容的にみても、家族形態の変化あり、予備校の発展ありで戦後改革により起こったといえないものばかりである（敗戦が戦前の諸権威に打撃を与え、戦後改革が学校体系を単線化したことが受験準備のシステム化の前提条件となったなどの関連はあるにせよ）。従って、時期区分として重要なのは、昭和22年よりは、昭和30—40年代を過渡期とするその前後の区分である。たしかに、戦後改革は、表面的には大幅な変化をもたらしている。例えば、士官コースの大幅削減、旧制高校・諸専門学校の新制大学への統一化など。しかし、昭和10年代に存在する受験生の感覚は戦時中も持続し、戦後に連続するのであって、顕著な変化が現れるのは、ようやく昭和30年代になってから徐々にである。

昭和30—40年代には、上記の三つの変化が相前後して訪れ、受験生の意味世界は決定的な変化を迎える⁽²⁾。

第三節 昭和30—40年代

における変化

それでは、この三つの変化は、どのように相互に関連し、また、社会その他の領域における変化とどのように関わっていたのだろうか。

まず第一と第二の変化は、受験生それ自身ではなく、受験生の周囲に起こっている変化であり、当時起こっていた社会的変化と関連づけて理解することができる。つまり、まず家族に関して、高度経済成長の中で様々な「家業」が「会社勤め」にとって代わられていったことから、父親が家にいなくなり、母親が家庭教育の主な担い手となってきたことから理解できる。また、受験準備のシステム化に関して言えば、まず、「会社勤め」化により、子供に与えてや

れる「美田」はただ学歴だけとなり、以前にも増して多数の親が積極的に受験に乗りだした。そのため、市場が拡大し、予備校その他の受験産業が確立した。また、経済成長の中で、その市場に応えるだけの資本が民間の中に育っていた。その中では浪人も数を増し、見逃せない顧客となり、社会的に承認された存在となって行く。親の側の受験の必要性の認識に伴い、進学率も高まり、学校は、進路指導や定期試験において「選び」の主要な装置という役割を負わされることになる。ここにおいて、受験産業・学校・家庭という受験準備システムの三本の柱が確立することになる。

第三の変化とは、そうした外的な状況の変化に対して、受験生が自分たちの生き方を守ろうとするためにとる手段の変化を表していると考えることができる。つまり、昭和10-20年代には、旧制高校に入ることは、長男の場合には家業を継ぐ義務からの、次三男の場合には財産分与に与れない状態からの解放を意味していた。しかし、高度成長期における以上のような変化、つまり「会社勤め」化の中での受験準備のシステム化は、むしろ大学受験のほうを強制的なものにするのである。そこにおいて初めて、受験生たちが、試験に対してシニカルになり、連帯して違反を行う話が面白さを持つようになってきた、と考えられる。

「受験ユーモア」という資料が示してくれるのは、実施側の資料からは問題とならない、「受ける側」に個有な論理の、このような18

0度の転換である⁽³⁾。

註

(1) ここで用いたデータは、『螢雪時代』読者については、編集部がプレゼント応募の折込はがきを用いて行った調査、その他は文部省の『学校基本調査』昭和63年度版を用いた。

(2) 従って本稿は、「昭和30-40年代」についてのひとつの見方を呈示している。つまり、「昭和30-40年代には学生の革新的意識が高まったが、50年代には再び保守化した」という見方に対して、本稿が主張しているのは、「昭和30-40年代」を過渡期とみて、昭和20年代以前と昭和50年代以降を異質な時代とみる見方である。昭和20年代以前は、保守的にしろ革新的にしろ学生は教師たちに従順であった。しかし、昭和30-40年代には、学生たちは教師とは別の論理に基づいて関係を形成し始めた、そのために多くの摩擦や華々しいカウンターカルチャーが生まれた。しかし、昭和50年代には全く異質の文化が形成されてしまったため、もはや表だった摩擦は生じない、という理解である。

(3) 本稿の限界の一つは女性にとっての受験の意味世界の変化と男性にとってのそれとの区別ができず、部分的に、男性の受験生を前提した記述になってしまったことである。そうならざるを得なかったのは、ひとつに、女性の投稿者は戦後にしかあらわれなかったためであり、いまひとつに、投稿者の性別を明瞭に区別する手段を欠いていたためである。

《参考文献》

- 天野郁夫 1983 『試験の社会史』東京大学出版会。
宮脇陽三 1981 『フランス大学入学資格試験制度史』風間書房。
文部省 1988 『学校基本調査』昭和63年度。
旺文社編 1985 『日本国「受験ユーモア」五十五年史』旺文社。

佐々木享 1984 『大学入試制度』大月書店。

清水義弘 1957 『試験』岩波書店。

(おなか ふみや)